

【原著】

高校一年次の学習時間

—定期考査および大学入試方法との関係性を中心に—

山村滋（大学入試センター），濱中淳子（東京大学）

大学入試センター研究開発部では、2012年度より3年間にわたり首都圏10校の高校生の学習行動を追跡するパネル調査を実施してきた。この研究成果を踏まえ、2016年度から地方都市や関西圏をも調査対象とした3年間にわたる新たなパネル調査を行っている。本報告は、2016年秋に実施した高校1年生を対象とした調査データを用いて、首都圏におけるパネル調査データによる知見に照らし、学習行動および学習行動と定期テスト・大学入試方法の関係性について検討したものである。

1. はじめに

周知のように高大接続改革が進められている。その一環として、2020年度には「大学入学共通テスト」の実施が予定されている。この高大接続改革は、知識基盤社会・グローバル化に求められる能力・学力の育成の必要性と大学生・高校生の学力低下への問題視という二つの要因を背景としている。後者に関しては、特に中間層と呼ばれる高校生の学習離れ・学習時間の減少を示す調査結果が政策論議の場で示されてきた。

確かに、高校生の学習時間の減少は、高校教育・大学教育にとって好ましいことではないであろう。しかしながら、センター試験に代わる新しい試験や高大接続改革によって、高校生の学習行動・学習時間を望ましい方向に向かわせることはできるのか。大学入試制度の改革にあたっては、現代の高校生にとって入試制度やそこで用いられているテストはいかなる位置づけにあるのか、その影響力はいかほどか、を把握することが不可欠である。ところが、現状はこの点の理解が甚だ欠けているのではないかと。高校生の日々の学習行動の背景には何があるのか。高校生の学習行動は、部活動や学校行事への参加など高校生の生活全体に位置づけて把握する必要がある。このような地点にまで立ち戻った上で改革の議論は積み上げられるべきである。かかる問題意識から、われわれは2012年度に入学した首都圏公立高校（進学中堅校、進学校）10校の生徒の学習行動を3年にわたって追うパネル調査（「第1次高校生学習行動パネル調査」、以下、第1次調査とする）を実施してきた。

その成果¹⁾は多岐にわたるが、改革論議で問題とされてきた進学中堅校の生徒に関して、学習時間および学習時間と大学入試や高校内での定期考査等との関係についての主な知見は以下のとおりである。

- ①高校前半期において、ふだんの学習時間が少ない生徒が多い。
- ②高校前半期の学習時間が後半期の学習時間の伸びを

左右する。

- ③ふだんはあまり学習時間を割かないが、定期テストの時期のみ時間を費やすという学習行動の生徒が多い。
- ④定期考査が進学校ほど学習への誘因となっていない。
- ⑤一般入試が学習へのインセンティブになるのは高校後半期になってから。
- ⑥指定校推薦は、定期考査時のみのインセンティブにしかない。
- ⑦指定校推薦志向者のうち、成績の低下した者、学習意欲の低下した者が一般入試へと志向を変える。
- ⑧AO入試への志向の強まりは学習から遠のくことをもたらず。

以上のような知見は、入試改革によって高校生の学習行動—とりわけ進学中堅校（およびそれよりも入学が容易な高校）に通う高校生の学習行動—を促すことの限界を示唆していると言えよう。

ただし、われわれが調査対象としたのは、首都圏2県の高校であるという限界を抱えるものであった。そこで2016年度よりさらに広い地域でのパネル調査（「第2次高校生学習行動パネル調査」）を計画・実施し、入試改革の議論に、実証的なデータをもとに資することを目指している。

「第2次高校生学習行動パネル調査」計画は図1に示したとおりである。2016年度に高校に入学した生徒を3年次まで追ひ、卒業後の進路データまでを収集する。今回の対象は全国5地域（大都市圏〔関西圏および首都圏〕・地方都市それぞれ二つ、および前回の協力校のある首都圏）の17校（進学中堅校8校、進学校9校）であり、毎年2学期に3年間で3回調査を実施する。調査対象者数は、約4800名である。なお、調査内容は、前回のそれは「学習行動と大学入試との関わり」が中心であったが、この点に加えて、前回調査でより深い分析の必要性が認められた「友人との関わり方」「学校・教員の働きかけ」等を加えることにした。

本報告では、2016 年秋に実施した高校 1 年次の調査データを分析する。具体的には、1 年次のみでのデータで検討可能な上記の知見①, ③, ④, ⑥に関して、首都圏および関西の大都市圏や地方都市等でも妥当であるか否かについて検討するとともに今後の課題を明らかにする。

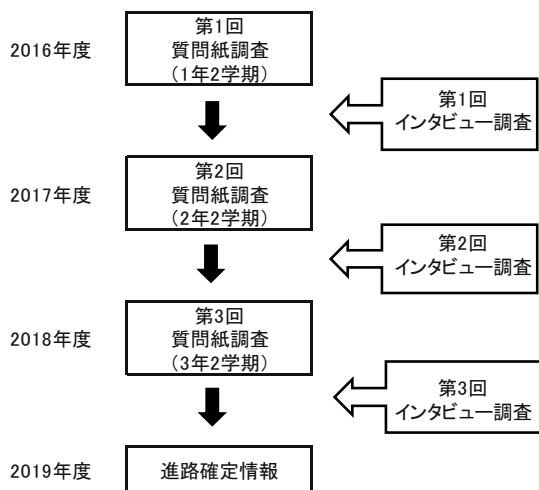


図 1 調査の流れ

2. 学習時間

2.1 ふだんの学習時間

まず、ふだん(平日)の学習時間を見ておこう。図 2 は進学中堅校に関して、地域別にその分布を集計したものである。「まったくしない」生徒は、大都市圏 1 では 46%、大都市圏 2 では 39%であるのに対して、地方都市 1 では 7%、地方都市 2 では 10%である。さらに「1 時間ぐらい」以下については、大都市圏 1 では 88%、大都市圏 2 では 82%にのぼる。また、地方都市 1 では、「1 時間ぐらい」以下は 60%、地方都市 2 では 44%である。ここからわかるように、進学中堅校生の学習離れは、特に大都市圏で著しいことがわかる。これは前回の首都圏の進学中堅校生の状況と一致する。つまり、学習離れは、大都市圏においてより強い傾向があると考えられる。が、同時にたとえば地方都市 2 でも半数弱の生徒が「1 時間ぐらい」以下しか学習に充てていない状況は看過すべきでない。

一方、進学校に関しては以下のものであった(図 3)。こちらは、大都市圏 1~3、および、地方都市 1 でほぼ同様の傾向がみられたが、地方都市 2 は、学習時間に相当な差がある(平均で 62 分~72 分程度)。地域的差異についてはさらに他の地域のデータを収集することが必要である。

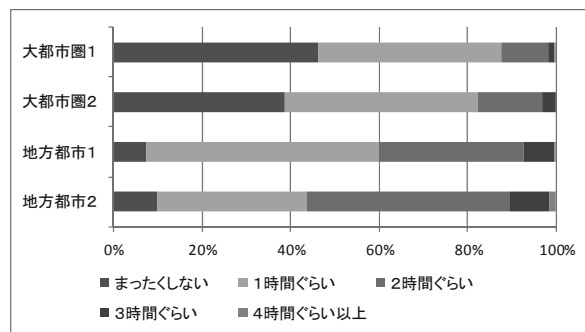


図 2 ふだん(平日)の学習時間(進学中堅校)

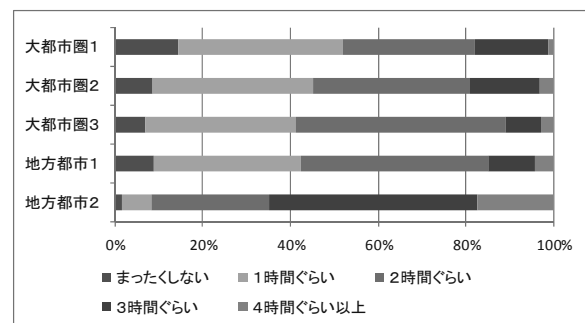


図 3 ふだん(平日)の学習時間(進学校)

2.2 テスト期間中の学習時間

では、テスト期間中の学習時間はいかがであろうか。前回の調査研究では、進学中堅校生は、1 年 3 学期の時点で 3 時間ぐらい以下の割合は 79%であった。この 3 時間という数字は、1 日に 3 科目、試験があるとすると 1 科目当たりわずかに 1 時間以下の学習時間を意味している。

今回のデータによるテスト期間中の学習時間は、図 4 に示したとおりである。「3 時間ぐらい」以下の比率は、進学中堅校の場合、51%と過半数に達している。前回よりはその比率は低いものの、それでも約半数の進学中堅校生は 3 時間ぐらい以下しかテスト期間中も学習していない。このことは、前回のデータ同様、定期考査が学習誘因としては効果あるものとして機能していないことを示していると言えよう。この点については、さらに 3 節で検討を加える。

なお、進学中堅校に関して地域別にみるならば、「3 時間ぐらい」以下の生徒の割合は、大都市圏 1 で 57%、大都市圏 2 で 49%、地方都市 1 で 60%、地方都市 2 で 36%であった(図 5)。地方都市 2 では、その割合は低い。

ふだんの学習時間と同じく、定期テストの学習時間に関しても地域的な差異は確かにある。今後、他の地域のデータを収集することと共に、県教育委員会の方針等との関わりからの分析も必要とされる。

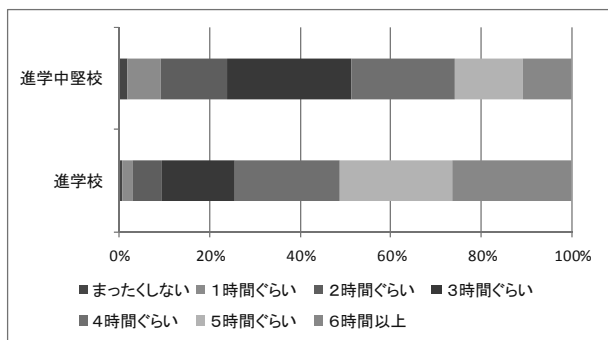


図4 テスト期間中の学習時間

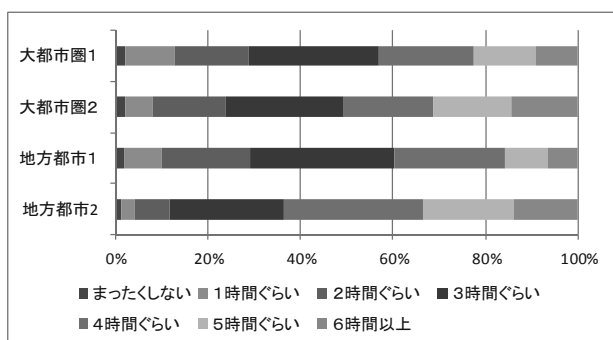


図5 テスト期間中の学習時間(進学中堅校:地域別)

2.3 進学中堅校生の学習時間の特徴

前回の調査で、進学中堅校生の学習時間の特徴として「メリハリ型」が多いことが見いだされた。「メリハリ型」とは、ふだんとテスト期間中の学習時間をそれぞれ少ない・多いに区分し、四つの分類にした場合の、「ふだん:少ない、テスト期間中:多い」という学習時間のタイプである。

なお、今回の調査では、学習時間の回答区分を前回と変えたため「多」と「少」の境界を下の表1ように設定した。

この区分によって進学中堅校と進学校のそれぞれについて四類型の分布を示したものが図6である。この図から分かるように、今回のデータにおいても、進学中堅校の生徒にはメリハリ型が多い。

表1 学習時間の四類型

		テスト期間中	
		2時間ぐらい以下	3時間ぐらい以上
ふだん	1時間ぐらい以下	ふだん:少、テスト期間:少	ふだん:少、テスト期間:多 【メリハリ型】
	2時間ぐらい以上	ふだん:多、テスト期間:少	ふだん:多、テスト期間:多

進学中堅校に関して、これらの四つの類型別に成績(5段階、自己申告)の平均を算出したものが表2である。メリハリ型の生徒は、ふだん・テスト期間中とも学習時間が多い生徒ほどではないにしても、平均はそれに近い値と

なっている。メリハリ型の生徒は、テスト期間中に集中的に学習することによって一定の成績をおさめているといえよう。

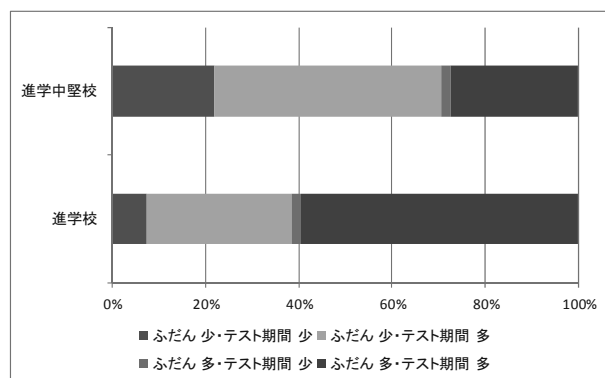


図6 学習時間の四類型の分布

表2 成績の平均(進学中堅校)

学習時間の類型	平均	SD	N
ふだん 少・テスト期間 少	2.52	0.98	443
ふだん 少・テスト期間 多	2.87	0.95	991
ふだん 多・テスト期間 少	2.76	1.04	41
ふだん 多・テスト期間 多	2.90	1.01	557

3. 進学中堅校の定期考査の特性

この理由として、前回の調査で浮かび上がってきたのが「定期考査の難しさ」であった。すなわち、定期考査対策として、ふだんはあまり学習せずとも、テスト期間中に集中的に学習すれば一定の成績がとれるというものに進学中堅校の定期考査はなっていた(濱中・山村, 2016)。

同様の傾向は今回のデータからも確認できる。図7に示すように、「定期考査は難しい」について「よくあてはまる」という回答の割合は、進学中堅校では33%であるのに対し、進学校では58%であり、進学中堅校の2倍近くに及んでいる。つまり、進学中堅校と進学校における定期考査の特性は、首都圏以外の地域でもあてはまるものと考えられよう²⁾。

4. 入試方法志向と学習時間

4.1 入試方法志向

次に入試方法志向が学習時間にどう影響・関わりを持つかを分析する。「入試方法志向」とは、一般入試、指定校推薦、公募推薦、AO入試といった様々な入試方法のうち、各生徒がもっとも真剣に受験を考えている方法のことである。

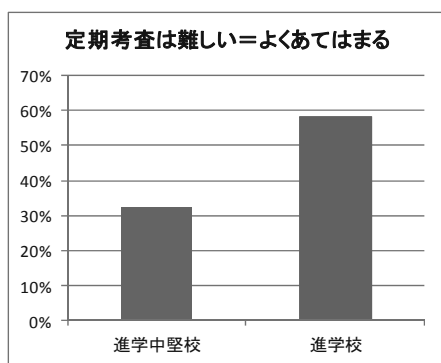


図 7 定期考査の難しさ

まず、入試方法志向の分布について確認しておこう(図 8)。ここでは四年制大学への進学を第一希望とする生徒に限定してある³⁾。

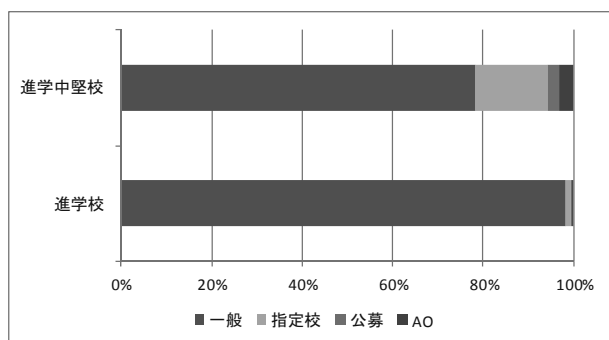


図 8 入試方法志向

進学校では、一般入試をもっとも真剣に考えている入試方法とする生徒の割合は 98%に達し、指定校推薦等の割合は極めて僅かである。一方、進学中堅校では、一般入試を志向する生徒の割合は 78%、指定校推薦は、16%、公募推薦、AO 入試はそれぞれ 2%、3%であった。前回の調査では、進学校の生徒の入試方法志向は、1 年 3 学期において 98%であったので、調査時点は異なるが、ほぼ全員が一般入試志向という点はかわらない。

一方、進学中堅校に関しては、1 年 3 学期の時点で一般入試は 63%、指定校推薦が 27%、公募推薦は 6%、AO 入試が 4%であった。今回の調査で一般入試の割合が一番多く、次に指定校推薦という割合の傾向は同様であるが、その割合には相違がある。

これにはやはり大都市圏と地方都市という立地の相違が影響していると考えられる。図 9 は、進学中堅校の入試方法志向を地域別に示したものである。大都市圏 1 では一般入試が 60%、指定校推薦が 32%である。また大都市圏 2 では、一般入試、指定校推薦はそれぞれ 67%、23%であった。この点に関しては前回の首都圏の傾向と

ほぼ同様の傾向が見られるとってよいであろう。

これに対して、地方都市 1 では一般入試が 99%、地方都市 2 では、一般入試は 87%、指定校推薦が 6%であった。指定校推薦は私立大学でその募集人員・割合が高い。地元の大学の数や設置形態等がここには反映していると考えられるが、大学進学者の流出・流入状況や各高校の進学指導方針等に照らして今後分析する必要がある。

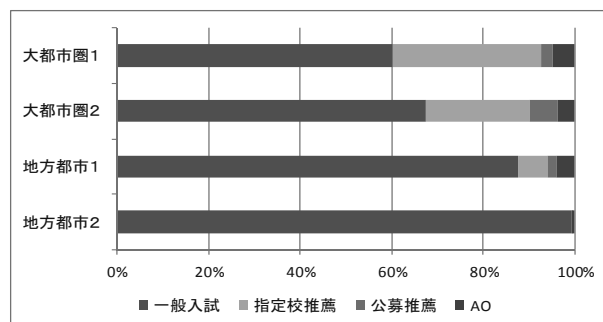


図 9 地域別に見た進学中堅校の入試方法志向

4.2 入試方法志向と学習時間

では、入試方法志向が学習時間にいかなる影響を及ぼしているのかを線形混合効果モデルを用いて検討しよう。第 1 次調査では、1 年次における入試方法志向の影響は、進学中堅校に関しては、指定校推薦志向がテスト期間中に見られたのみであった(濱中ほか, 2014)。

ここでは前回の分析に照らした上で、「ふだん(平日)」と「テスト期間中」の学習時間それぞれを被説明変数とし、説明変数には、入試方法志向の他に通塾日数(週あたり)、部活動日数(週あたり)、勉強に熱心な学内友人、勉強に熱心な学外友人、進学したい学校(明確度)、進学したい分野(明確度)、就きたい仕事(明確度)、進路指導、性別(女子ダミー)、を投入した。テスト期間中の学習時間に関しては、ふだん(平日)との関係を確認するため、ふだんの学習時間も説明変数として加えた。なお、ここでも第一志望を四年制大学とする生徒のみに限定した⁴⁾。

表 3 がその結果である(尤度比検定の結果、通常の変数との統計的有意差があることが確認された⁵⁾)。変数の作成方法は表 4 に示してある。ここでは入試方法志向に注目しよう⁶⁾。

進学中堅校に関して、AO 入試ダミー、公募推薦ダミー、指定校推薦ダミーのうち、有意差が認められるのは、テスト期間中の指定校推薦ダミー(+)と公募推薦(+のみであった。ふだん(平日)に関しては、三つのダミーはいずれも有意ではない。

進学中堅校に関して、ふだんの学習時間の違いは、

受験を考えている入試方法によっては生じないのである。一方、テスト期間中には、指定校推薦で進学しようとする生徒は、一般入試で受験しようとする生徒よりも学習時間が長い。指定校推薦を校内で得るには、一般に学校

表3 線形混合効果モデルによる推定結果

固定効果	進学中堅校		進学校	
	ふだん(平日)	テスト期間中	ふだん(平日)	テスト期間中
切片	0.911 **	1.156 **	2.184 **	1.901 **
ふだん(平日)の学習時間		0.593 **		0.546 **
女子ダミー	0.168 **	0.508 **	0.131 **	0.425 **
通塾日数(週あたり)	0.165 **	0.029	0.126 **	0.014
部活動日数(週あたり)	-0.041 **	0.048 **	-0.048 **	0.070 **
進学したい学校(明確度)	0.109 **	0.025	0.132 **	0.049
進学したい分野(明確度)	-0.006	-0.121 *	0.097 **	-0.004
就きたい仕事(明確度)	0.082 **	0.149 **	0.037	0.013
勉強に熱心な学内友人	0.101 **	0.045	0.040	0.135 **
勉強に熱心な学外友人	0.013	0.056	0.015	0.008
進路指導	-0.001	0.020	-0.002	0.033 **
AO入試ダミー	-0.034	-0.028	0.052	0.115
公募推薦ダミー	-0.202	0.433 *	-0.404	0.542
指定校推薦ダミー	-0.060	0.323 **	-0.195	0.121
変量効果				
学校間分散(標準誤差)	0.115(0.060)	0.083(0.047)	0.286(0.136)	0.081(0.041)
生徒間分散(標準誤差)	0.550(0.021)	1.496(0.056)	0.731(0.021)	1.376(0.040)
学校数	8	8	9	9
N	1444	1441	2325	2320

** 1%水準で有意 * 5%水準で有意

表4 変数の作成方法

変数	作成方法
学習時間	まったくしない=0, 1時間ぐらい=1, 2時間ぐらい=2, 3時間ぐらい=3, 4時間ぐらい=4, 5時間ぐらい=5, 6時間以上=6
女子ダミー	女子=1, 男子=0
通塾日数	塾・予備校に通っている1週間あたりの日数
部活動日数	週あたりの部活動日数
進学したい学校(明確度)	進学したい学校は、決まっていない=1, おおまかには決まっている=2, 決まっている=3
進学したい分野(明確度)	進学したい分野は、決まっていない=1, おおまかには決まっている=2, 決まっている=3
就きたい仕事(明確度)	将来就きたい仕事を選択肢から選んでもらい、その選択に対してたずねた回答を利用。他の仕事でもかまわない=1, とりあえず就きたい=2, できれば就きたい=3, ぜひ就きたい=4
勉強に熱心な学内友人	多くない=1, あまり多くない=2, やや多い=3, 多い=4
勉強に熱心な学外友人	多くない=1, あまり多くない=2, やや多い=3, 多い=4
進路指導	学校の先生から次のことをいわれるかどうかについてたずねた4段階尺度の回答を、それぞれ1~4で得点化し、足し合わせたもの。「できるだけいい学校への進学を目指すように言われる」「勉強時間を多くとるように言われる」「学校のランクより、分野・専門領域を重視して進学先を選びなさい」と言われる」「毎日の勉強が大事だといわれる」「『楽な方向に流されて、進路を選ぶことはやめなさい』と言われる」
AO入試ダミー、公募推薦ダミー、指定校推薦ダミー	最も真剣に受験を考えている入試を1つ選んでもらう項目について、一般入試を基準にした3つのダミー変数を作成

の成績がよい必要がある。これが、指定校推薦志向の生徒がテスト期間中により学習する理由と見てよいであろう。また、公募推薦では学校の成績が合否判定の重要な資料となることが一般的である。このことがテスト期間中の学習誘因となっていると考えられる。しかしながら、定期考査が、ふだんから地道に学習しなければよい成績がとれないようなものとはなっていない、というのが第 1 次調査の知見であった(濱中・山村, 2016)。この点は上で見たように今回の分析においても確認できた。

一方、進学校においては入試方法志向はふだん(平日)、テスト期間中、ともに、学習時間への影響は確認できない。これは、進学校の生徒は大学入試にかかわりなく学習する、と解釈できよう。

5. おわりに

本報告では、第 1 次調査の知見が、首都圏以外でも妥当であるのかについて検証することを目的とした。以下、「はじめに」で検討課題とした四つの知見にそって整理しておきたい。

進学中堅校生のふだん(平日)の学習時間(知見①)に関しては、大都市圏を中心として、学習時間が少ない傾向が強いが、地方都市においてもそのような生徒は少なからず存在する。

進学中堅校生の学習行動には、ふだんはあまり学習に時間を割かないが定期テスト時においてのみ多く学習する、いわばオンとオフを切り分ける「メリハリ型」が多い(知見③)ことが、今回も確認できた。

その背景には、進学中堅校の定期考査の特性が進学校とは異なる(知見④)ことが、やはり要因のひとつとなっていた。

大学入試方法・志向との関わりでは、進学中堅校生にとって、1 年次の段階では、テスト期間中に限って指定校推薦は学習時間への誘因となっていた(知見⑥)。なお、公募推薦にもテスト期間中に限って学習誘因としての効果が認められた。

以上、地方や関西の大都市圏も対象に加えた第 2 次調査によって、第 1 次調査の知見が、1 年次に関してではあるが、より広い地域で妥当であることが確認できた。改革にあたっては高校生の学習行動の精確な理解に基づくべきとのわれわれの主張に更なる根拠が与えられたのである。

本報告では、1 年次という 1 時点のデータによる分析であったが、2 年次、3 年次のパネルデータを加えていくこと、および、学習の量的側面のみならず質的側面についてもアプローチすることにより、より多面的な分析を進めてきたい。

注

- 1) まとまったものとして、山村ほか(2014, 2016)がある。なお、高校生の学習行動をパネルデータを用いて詳細に分析した研究は、筆者らのもの以外、管見の限り見当たらない。
- 2) 進学中堅校と進学校の「定期考査は難しい」に「よくあてはまる」と回答する生徒の割合やその差が、学年が進行するにつれどう変化するのか、注目する必要がある。
- 3) その割合は、進学中堅校:81%、進学校:97%である。
- 4) 投入した変数に関しては、濱中ほか(2014)のモデルに、今回は「進学したい分野(明確度)」を加えた。なお、第 1 次調査での回答の仕方とは必ずしも同じではないものがある。
- 5) 尤度比検定の結果を表 5 に示す。

表 5 尤度比検定の結果

	ふだん(平日)	テスト期間中
進学中堅校	chibar2(01)=172.25 Prob>=chibar2=0.000	chibar2(01)=39.31 Prob>=chibar2=0.000
進学校	chibar2(01)=639.33 Prob>=chibar2=0.000	chibar2(01)=98.19 Prob>=chibar2=0.000

- 6) 入試方法志向以外の説明変数についても興味深い結果が出ているが、この点については稿を改めたい。

参考文献

- 濱中淳子・山村滋・鈴木規夫(2014). 高校一年次の学習時間——そのばらつきと背景を探る. 大学入試研究ジャーナル, 24, 15-20.
- 濱中淳子・山村滋(2016). 高校生の学習行動を問いただす——定期考査と教育産業の位置づけに着目して. 日本教育社会学会第67回大会予稿集, 58-61.
- 山村滋・濱中淳子・立脇洋介(2014). 『高校生の学習行動に関する調査研究——中間報告書』 大学入試センター研究開発部.
- 山村滋・濱中淳子・立脇洋介(2016). 『高校生の学習行動に関する調査研究—報告書』 大学入試センター研究開発部.